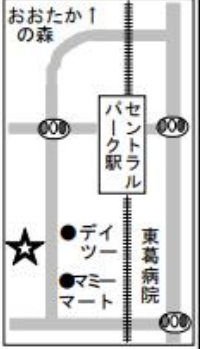


わがまち・ふるさと再発見!  
 流山のむかしを訪ねて  
 19 室町時代1

案内役 田村哲三



元弘3年(1333)、後醍醐天皇の討幕活動や足利尊氏、新田義貞らの挙兵によって鎌倉幕府は終焉を迎え、代わって政治を行ったのが後醍醐天皇です。時の元号から「建武の新政」と呼ばれます。しかし、新政は御家人や人びとの不評を買い、不安定な社会になって行きました。新政に不満を持った人びとは、武家の名門、足利尊氏へと期待を寄せていきます。尊氏は、それらの期待に押されるよう後醍醐天皇に反旗を翻し、後醍醐天皇側の新田義貞、楠木正成、北畠顕家らと全国各地で戦いました。



真和5年(1349)、幕府は関東を統治する機関として鎌倉に鎌倉府を置き、長官の鎌倉公方には2代将軍足利義詮の弟、基氏が就き、その子孫が代々鎌倉公方を世襲、補佐役の関東管領には上杉氏が代々次ぐことになりました。関東地方の政治は鎌倉府のもとで行われました。室町時代初期の流山市域の状況はどのようなものであったのでしょうか。

そうしたなか、尊氏は後醍醐天皇とは別の光明天皇(北朝)をたて、暦応元年(1338)、京都に室町幕府を樹立。室町時代が始まりました。一方、後醍醐天皇は吉野(南朝)に居を移し尊氏と対峙しました。この時代を南北朝時代と呼びます。やがて南北朝の対立も終焉に向かいますが、尊氏と弟の直義が争うなど、社会の安定を得るまでには時間がかかりました。

荘園となっていたのでしょうか。また、応永17年(1410)の香取神宮建設費では矢木の薬師堂の名があり、明治4年まで存在した思井の薬師院と推定されます。

このほか、中旧長福寺の永和3年(1377)の宝篋印塔や鎌倉時代の作とされる愛染明王坐像、文明12年(1480)作とされる西平井本覚寺の鬼子母神像などから、八木地域一帯には高度な文化圏があったものと推定されます。

わがまち・ふるさと再発見!  
 流山のむかしを訪ねて  
 20 室町時代2

案内役 田村哲三

鎌倉府は京都本社(室町幕府)に対し、鎌倉支社のような立場で関東を治めていましたが、次第に関東の幕府と呼ばれるほどの権力を持つようになり、やがて府の長官の鎌倉公方は、室町幕府や将軍に対し反動的になり自立しようとし、お目付け役の関東管領上杉氏は、鎌倉公方を諫めますから公方と管領の間に亀裂が入りました。



春丸・安丸の墓  
 (岐阜県不破郡垂井町関ヶ原古戦場)

応永23年(1416)、前関東管領上杉禪秀は4代目鎌倉公方足利持氏に反旗を翻し持氏を攻めます。これを「上杉禪秀の乱」と呼びます。危機を脱した持氏は、関東各地に軍を派遣して禅秀派の討伐を進めました。永享11年(1439)、今度は持氏が上杉氏を攻めますが、上杉氏に付いた幕府軍により攻められ自害しました。

幕府は不在になった鎌倉公方に6代将軍足利義教の子を任じようとしていましたが、鎌倉公方は足利尊氏が決めた基氏の子孫が継ぐという意思に反するため、鎌倉公方を支持していた下総の結城氏などが反発しました。永享12年(1440)、結城氏らは持氏の遺児春丸、安丸、永寿丸を擁して結城城に立てこもります。

幕府は上杉氏に加え今川氏、小笠原氏を討伐に差し向けました。これを「結城合戦」と呼びます。1年の籠城

戦の末、結城方は敗れ春丸、安丸は京に送られる途中の関ヶ原で殺されました。このとき幼少(6歳)の永寿丸は助かります。翌嘉吉元年(1441)、今度は將軍義教が赤松氏に殺される事件が起きます。この事件により義教の子の鎌倉公方就任はなくなりしました。

しばらくの間、鎌倉公方は不在でしたが、文安4年(1447)、持氏の遺児永寿丸が足利成氏と名乗り5代目鎌倉公方に就きます。関東管領は上杉憲忠です。初めは幕府に従う形でいましたが、成氏は着々と権力の拡大を図り、結城合戦で滅亡した氏族の再興も進めました。そして、享徳3年(1454)、成氏は関東管領の上杉憲忠を殺してしまいました。ここに鎌倉公方と関東管領の戦いが始まります。この戦いはやがて関東全域を巻き込んだ戦いと発展します。これを「享徳の乱」と呼びますが、関東の戦国時代の幕開けとなりました。

わがまち・ふるさと再発見!  
"流山のむかしを訪ねて"

②1 室町時代3

関東の戦国時代1 業内後 田村哲三



前号で述べたように享徳の乱(1454)は、足利幕府・関東管領上杉氏と鎌倉公方の亀裂から始まったといえます。乱は鎌倉公方足利成氏が開東管領上杉憲忠を暗殺したことから始まりましたが、成氏は鎌倉を追われ下総の古河(茨城県古河市)へと移ります。ここで古河公方と名乗った成氏は、下総北西部や北関東の勢力を従え関東管領上杉氏と対峙します。

管領上杉氏は幕府の支援を得て、五十子(いっご)・埼玉(本庄市)に拠点を置き、南関東の勢力を結集しました。ここに関東は旧利根川を挟んで2大勢力が戦いを繰り返すこととなります。

しかし利根川を挟んだ勢力の戦いだけではなく、氏族の本家と分家や親兄弟らがそれぞれの陣営に付き争いました。下総の守護千葉氏は本家の千葉胤直が幕府・上杉氏側に、分家馬加康胤は古河公方側に付いて下総国内で戦いました。結果は分家馬加康胤が勝って本家を乗っ取り千葉氏を名乗りました。千葉氏の内乱では流山市域も戦に巻き込まれました。

北小金の本土寺過去帳には、長禄2年(1458)、沓掛長門守がヤギの城にて打死とあり、ヤギの城で戦いがあったことがわかります。ヤギの城がどこか特定されませんが、シリーズ17で書いたように、思井の堀ノ内遺跡ではないかと推定されます。

古河公方御所跡関(茨城県古河市)



当遺跡は千葉一族の矢木氏の居館とも推定されていることから、千葉氏の内乱に巻き込まれたものと考えられます。矢木氏が歴史上から忽然と消えていることは、「この戦が要因だったのかもしれない」。

さらに本土寺過去帳には、寛正7年(1466)、境根の塩売彦四郎が「ヤギ船津三テウタル」とあり、8年後も八木で戦がありました。船津がどこかわかりませんが、船津は船の発着場ですから、八木の台地の下は湿地帯や河川であったでしょう。塩売りは、産地から内陸に塩を売っている商人ですが、情報の伝達も行ったのかも知れません。翌年の文正2年(1467)の項には、深井の次郎太郎が「野田三テウタル」とあるので、深井や野田も戦場になっていたことがわかります。おそらく流山市域や近隣各地も戦場になっていたでしょう。

わがまち・ふるさと再発見!  
"流山のむかしを訪ねて"

②2 関東の戦国時代2

前ヶ崎城の戦い 業内後 田村哲三



享徳の乱は30年も続いていましたが、古河公方と関東管領は和睦の道を探りはじめます。ところが今度は、関東管領上杉氏の家臣、長尾景春が主家に反旗を翻し、五十子城を攻め、さらに千葉教胤と結んで上杉氏と対峙します。千葉教胤は、古河公方側でしたが和睦が進むことで、千葉氏の本宗家が復活することを恐れていました。

事態を重く見た幕府は、上杉氏の方家・扇谷上杉氏の家老太田道灌に両者の征伐を命じます。太田道灌は江戸城を築いた文武両道の名将で、「山吹の里」の逸話が有名です。道灌は武蔵の各地を転戦して活躍しましたが、文明10年(1478)、下総に進出して千葉教胤と戦います。国府台に本拠を置いた道灌は、松戸や流山、柏周辺で千葉方と戦いました。その一つが「前ヶ崎城の戦い」です。

本土寺過去帳の文明10年11月3日の項に「前ヶ崎落城太田六郎殿戸張彦次郎殿打死」とあり、前ヶ崎城で合戦があったことがわかります。

太田六郎は道灌の弟とされ、戸張彦次郎は柏市戸張の武將で、千葉氏の一族です。道灌に付いたとすれば、千葉本宗家側で教胤と対立していたのでしよう。このとき前ヶ崎城は道灌側の城であったといえます。城は道灌が臨時に築いたか、それとも、



前ヶ崎城址

もともとあった城を道灌が使用したのか不明です。現在の城址は小金城の支城となつて整備されたものです。前ヶ崎城の戦いでは千葉教胤が勝ちましたが、7日後に境根原(柏市)で両軍が激突し、今度は道灌が勝利します。戦いは1日中続きましたが、教胤は多くの一族、家臣を失って本拠地の臼井城に退きました。

柏市光が丘には戦死者を葬った2つの塚があり、首塚、胴塚と呼んでいます。

柏市高田の武將である匝瑳勘解由は教胤側で戦い戦死しています。近くの高田と戸張の武將が敵味方であったなど、当時の世相を反映しています。道灌は教胤を追って臼井城を攻めますが、大田資忠(弟や甥という)を失うなど攻め倦んで引き上げます。

わがまち・ふるさと再発見!  
 流山のむかしを訪ねて

23 関東の戦国時代3  
 案内役 田村哲三



◆享徳の乱  
 30年にも及んだ享徳の乱。太田道灌の活躍で長尾景春が降伏。千葉教胤も鳴りを潜め、古河公方と関東管領が和睦し終焉を迎えましたが、戦いが終わらないのが戦国時代です。

◆長享の乱  
 今度は関東管領の山内上杉家(本家)と分家の扇谷上杉氏の戦いが勃発(山内、扇谷はそれぞれ)

の居館があった鎌倉の地名からそう呼ばれた)。扇谷上杉氏は、家老の太田道灌の活躍もあり、本家を凌ぐほどに躍進しましたが、文武の誉れ高い道灌に嫉妬した当主の上杉定正が道灌を暗殺。道灌を失い、定正のプレキ役はなく、己の力を過信し本家に戦いを挑みました。関東管領職を奪おうとしたのでしょう。この長享の乱は長享2年(1487)から18年続き、定正の降伏で収束しました。

杉氏を支援した小田原北条氏。乱をきっかけに武蔵国へ進出し、関東制覇に動きまわります。両家の争いは武蔵を中心としたもので、流山に影響がなかったのか記録はありません。本土寺過去帳には「文亀2年(1502)3月8日 日桐ヶ谷で誅殺」とありますが、長享の乱がらみかは不明です。

◆永正の乱

上杉家の内乱が終焉した翌年、古河公方家で内紛が始まります。永正3年(1506)、公方の足利政氏と嫡男高基が公方をめぐり争い、高基の公方就任で決着。しかし、今度は高基の弟の義明と対立。これを永正の乱と呼びます。

永正14年(1517)、義明は古河を出て千葉氏の家臣原氏の小弓城(千葉市)を奪い、房総の里見氏や武田氏が義明を支援。城を失った原氏や家臣の高城氏は千葉氏の地盤であった小金地域に移り、足利義明は小弓城を拠点に小弓公方と名乗り、

「我、関東の將軍にならん」と宣言。古河を目指して攻め上り、古河公方を滅ぼし、京都とは別の「関東の將軍」になろうとしたのでしよう。平安の昔、平将門が新皇と称し、関東に独立国を築こうとしたのと同じ思いだったのかも知れません。千葉と古河の間に位置する流山周辺は、両軍の激突する場となりました。本土寺過去帳には「永正14年4月、高城治部少輔が番匠免(三郷)で打死」、同年閏10月、「馬橋で群蒜右京亮、戸部三郎左衛門討たれる」とあります。群蒜氏や戸部氏は現在も市内に残る姓で、高城氏の有力な武将であったのかもしれない。永正18年(1521)3月、名都借で群蒜彦五郎、田嶋図書助、鈴木太郎右衛門らが討死とあります。松戸市の資料には同年、小金の行人台城で小弓軍と高城軍が戦ったとあり、行人台城は根本内城の近くで高城氏の城であったといわれます。これらの戦いはまさに古河を目指す小弓軍と阻止する高城軍との戦いだったのでしよう。

わがまち・ふるさと再発見!  
 流山のむかしを訪ねて

24 関東の戦国時代4  
 案内役 田村哲三



前号で三郷や馬橋、小金、名都借などの戦いを書きましたが、深井原でも戦いがありました。この戦いは小弓公方と高城胤吉によるもので、本土寺過去帳には「高城民部少輔フカイニテ打死 同石井弥七朗若衆也」と高城民部少輔討死同家風五十余人」とありますが、深井原がどこか特定できません。当時、東深井の江戸川台寄りや江戸川台、美原などは原野であったのでこの辺りと考えられます。小弓公方は流山周辺での戦いを有利に進め、古河を攻略する拠点の城を名都借に築きました。

これに対し古河公方の重臣、関宿城の梁田氏は、大永7年(1527)、配下の鮎川氏が率いる水軍で、名都借城を攻めました。鮎川氏は下総猿島を拠点に太日川や常陸川で活躍した武将で、名都借攻めは太日川や坂川を利用して攻めてきたと考えられます。結果は小弓公方が撃退。古河公方が鮎川氏宛てに送った感謝状には次のように書かれています。

「名都借要害を攻めた時、奮戦してけがを負ったことは大変神妙也。今後忠節を尽くすように」  
 大永七年十一月三日  
 足利高基花押  
 鮎川美濃守との

享禄2年(1529)、鮎川氏は再び名都借城を攻めます。この戦いの勝敗は不明ですが、翌享禄3年、高城胤吉は名都借城の至近に小金城築城の縄張りをしていいることから、小弓公方が負けて小弓城に戻ったと思われます。天文6年(1537)に小金城は完成。翌天文7年、小弓公方・里見義堯対古河公方・北条氏綱が国府台で激突。いわゆる第1次国府台合戦が起こりました。相模台や国府台で戦いましたが、小弓公方足利義明は討死。30年続いた永正の乱は終結し、以後、北条氏の関東支配が強まります。千葉氏は臼井城を本拠とし、原氏は小弓城に復帰。高城氏は小金城を本拠として周辺へ勢力を拡大していきます。また、千葉氏や原氏と微妙な関係を維持しながら北条氏の傘下へ塾足を移していきます。北条氏は古河公方と婚姻関係を結び、北条氏系の公方が誕生する。関東管領上杉氏を越後に追いやりました。しかし、房総の里見氏や常陸の佐竹氏などは反北条氏を貫きました。

永禄3年(1560)夏、今度は越後の長尾景虎が動きます。関東に進出した景虎は、反北条の勢力を結果して関東の城を次々と落とし、味方に加えて北条氏の小田原城を攻めますが、堅牢な城は落ちません。雪解け前に帰国しないと周辺勢力に攻め込まれる恐れもあり、翌年の春に越後に引き上げました。景虎の進攻で高城氏は景虎に下りましたが、景虎が帰国すると素早く北条氏側に復帰。反北条の関宿城と対立しました。